

明治期中等学校図画教員の研究 (6)

— 東 京 府 —

金 子 一 夫*

1 はじめに

本稿は『茨城大学教育学部紀要』第39号に発表した同題の論文(5)に続くものである。東京府下の私立の女学校および高等女学校の図画教員の勤務一覧を作成し、各学校の図画教員について簡単な説明をつける。女学校は中等学校に該当しないかもしれないが、たとい高等女学校にならなかった女学校でも図画教員が判明した場合は、取り上げた。

明治期の東京府下の私立女学校あるいは私立の高等女学校は多数に上る。良家の子女の教育だけではなく、ミッション系の女学校では伝道の意味ももっていたり、設立の目的や歴史はさまざまである。それゆえ、前稿の東京府下私立中学校の場合と同様に学校の歴史にも簡単に触れる。

東京府下の女学校はミッション系の学校が多いのが特徴である。また、女子の学校の図画教育の特徴は、教育内容として日本画が多いこと、そして担当教員の多くが女性であることと言えよう。

2 女学校または高等女学校の図画教員

跡見女学校——明治八年跡見花蹊が神田に開いた跡見学校が当学校の始まりで、大正8年まで花蹊が校長を勤め、日本画も教授した。跡見女学校は早くから皇族華族の子女が入学したため、一躍私立女学校の代表的存在となる。そして、明治三十九年から高等女学校令に準拠した教育課程となった。跡見花蹊は天保十一年撰津国に生まれ、大阪で石垣東山、植野楚山に画を学び、後に京都で円山応立、中島来章に学んだ。花蹊は跡見女学校で生徒と書画会を催したり、生徒作品を各種展覧会に出品させたという¹⁾。また、跡見女学校で花蹊に学び、さらにその養子となった跡見李^{ももこ}子も、明治20年代から日本画を教えたとされる²⁾。明治四十一年頃、東京美術学校西洋画科選科卒業の跡見泰^{ゆたか}は同校理事であるが、西洋画も教えたらしい³⁾。跡見泰は花蹊の甥にあたるが、後に跡見李子の養子となった寿子と結婚した⁴⁾。また、花蹊の従妹に日本画家の跡見玉枝がいる。玉枝も跡見女学校で教えたのではないかと想像されるのであるが、確認できなかった。

立教高女——プロテスタント系ミッション、アメリカ聖公会(監督派)のウイリアム師の指導の下に米人ブランシェーの開設した学校が原点である。⁵⁾明治三十二年私立女学校許可願を東京府に提出し、私立立教女学校と改称する。この時点から教科として画学があったことは許可願の内容から確実であるが、それ以前の画学の有無については不明。図画教員として判明しているのは、岡田秀と河原崎謙吉である。

*茨城大学教育学部

ともに東京美術学校の日本画科の同期卒業。河原崎謙吉は昭和期までの長期間勤務した。岡田秀の前にも必ず図画教員がいたはずであるが、判明しなかった。

女子学院——明治二十三年、新栄女学校と桜井女学校が合併して女子学院となる。⁶⁾新栄女学校、桜井女学校とともに最初期の女学校であり、アメリカのプロテスタント系ミッションの長老派が創立した。明治二十一年の「私立桜井女学校規則改正願」に画学があり、さらに高等科では希望者に画学として、墨画・水彩画・油画を教えることが記されている。⁷⁾少なくともこの時点から図画教員がいたはずであるが、明治三十七年頃の大野樵蘭と三十九年頃以降の池上とよだけ、当時中等学校の職員録から判明した。大野の経歴は不明。池上は山口県出身で共立女子職業学校造花科卒業生であるが、荒木寛敏に南北合派を学び緑畝と号した日本画家であった。

青山女学院——アメリカのプロテスタント系ミッション、メソジスト監督派の学校で、最初は海岸女学校と称する。明治二十一年上級生のみ東京英和女学校という別な学校を設置し編入したが、二十七年統合して青山女学院となった。男子の青山学院中学と同じく、岩村透、小代為重が図画教員となっている。ただ、岩村透は青山女学院では職業部で教えたらしい。また、青山学院では岩村、小代の他に松本富五郎（東京英和学校時代）、夏井貞蔵も図画教員として判明しているが、彼らも青山女学院で教えたかどうかは不明である。

東洋英和女学校——カナダのプロテスタント系ミッション、カナダメソジスト派創設の学校で、創設の時点から画学が設置されている。⁸⁾ただ、最初は専門の図画教員はいなかったらしい。菊地ますの勤務は『東洋英和女学校五十年史』（昭和9年）の旧教職員表による。ただ、経歴等是不明。

明治女学校——明治十八年木村熊二、巖本善治、植村正久らによって発起された学校で、最初は木村熊二、後に巖本が校長となる。教員や生徒の織りなす人間模様が特異なため、多くの小説や研究書で取り上げられる。⁹⁾明治四十年に廃校になったせいもあって、三十年代の図画教員は不明である。神中糸子の勤務期間は「大田将勝『日本美術教育史攷(1)工部美術学校研究』——同校出身画家・神中糸子を中心に」を参照した。¹⁰⁾神中は言うまでもなく、和歌山県出身で工部美術の学校においてフォンタネージに洋画を学んだ女性。八木兼展の勤務については青山なお『明治女学校の研究』（昭和45年）所収の職員表を参照した。神中は洋画を教え、八木は日本画を教えたらしい。明治二十三年の職員表で八木の職名は幹理、二十四年は教員、二十五年は教員および取締役とある。八木は単なる教員ではなく、深く明治女学校の管理に関っていたと思われる。八木は兵庫県出身で滝和亭に学び、『和画講義』（明治24年）という著書を明治女学校在勤中に出している。明治後期は神戸女学院の図画教員となった。

頌栄女学校——岡見清致^{きよちか}が設立、岡見は明治十七年に頌栄（小）学校、十八年に頌栄英学校を設立し、それに続いて女学校を設立した。¹¹⁾いわゆるミッションスクールではないが、キリスト教的色彩の濃い学校であった。最初の図画担当教員は清致の実弟の岡見彦蔵（秀作）で、駒場農学校卒業生。図画専門ではなく、彦蔵の多くの担当教科の一つが図画である。そして、教科書として『西画指南』が挙げられている。明治二十三年からやはり清致の実弟の岡見千吉郎が図画教員となる。千吉郎は工部美術学校に学んだ、図画専門の教員である。明治十六年に工部美術学校を修了し、十七年八月アメリカに渡り、十九年一月から二十二年までミシガン州のランシング農学校に学んだ。なお千吉郎の妻岡見けいは、アメリカで医学を学び博士号を取得した最初期の女医であった。岡見正は清致の妹と結婚して岡見姓となる。ずっと習字科の担当が多かったと思われるが、明治四十一年頃中等学校職員録には、習字とともに毛筆画も教えたようになっているので記入した。岡見正は篤学の士で、書道の他に、西洋画を藤雅三に、西洋彫刻を小倉惣次郎に、日本画を瀧和亭に学んでいる。明治美術会展覧会に彫刻や油画を出品したこ

ともある。それ以外にも正は体操、唱歌、手工、物理学、植物学等を伝習所、講習会で学んでいる。岡見正の三男が仙波均平で、三宅克己に学び太平洋画会に属した。仙波均平も短期間、頌栄女学校で教えたという。¹²⁾ 岡見彦蔵の三男が岡見富雄（東京美術学校西洋画科大正三年卒業）で、この岡見富雄も美術学校生の時に頌栄女学校で教えていたという。¹²⁾

成立学舎女子部——神田成立学舎を経営していた中原貞七が、同地に女子部を設置したものの。女子部の校長に棚橋絢子になったが、二十八年に閉鎖となる。教員の認可願に跡見玉枝の名があるので、少なくとも初期の間は跡見が図画教員であったと思われる。跡見玉枝は跡見学園の項で述べたように跡見花隠の従妹で、長谷川玉峰や宮原易安に学んだ日本画家。

普連土女学校——アメリカフィラデルフィアのプロテスタント系ミッションのフレンド派（クエーカー）によって設立される。¹⁴⁾ ずっと図画を教えたと思われるのが副校長のメアリー＝ガンドレーで、英国出身。後に東京府に提出した履歴に明治二十年十月より同校において英語・西洋裁縫・水彩画教員として勤務中とある。¹⁵⁾ 明治三十七年一月没。鈴木みつの勤務は当時の中等学校職員録から判明。図画専門の教員であったが、経歴等は不明。

香蘭女学校——イギリス系の福音伝播会のビカステスが聖ヒルダ伝道会を設立し、その事業の一つとして同学校を設立した。¹⁶⁾ 教則に図画が入っているの、開校時から図画が教えられたと思われるが、担当者は不明。明治四十一年頃、荒木寛友、荒木義之の二名の図画教員が当時の中等学校職員録より判明。荒木寛友は本名を鐸といい、南北合派の荒木寛一の子、すなわち寛快の孫にあたる。父寛一や山本琴谷に学んだ。高橋由一の天絵楼に明治六年に入門したこともある。荒木義之は、山名貫義に学んだ土佐派の画家である。それゆえ、寛友と特に親戚関係はないように思われる。

東京女学館——伊藤博文、渋沢栄一らが結成した女子教育奨励会が設立した学校で、最初の頃の教員はほとんどが英国婦人である。¹⁷⁾ 最初から図画が教えられた。担当したと思われるのが、スーザン＝バーネットというロンドン大学卒業の女性である。¹⁸⁾ また、同じくマクレーという女性も、サウスケンジントンの美術学校の画学免状を有しているというので、担当したかもしれない。¹⁸⁾ 原国（くに）の勤務は当時の中等学校職員録より判明したが、経歴等は不明。原は後述の仏英和高女でも後に教えた。

精華高女——アメリカのプロテスタント系ミッション長老派のツルー夫人が、働きながら学ぶことのできる女学校として開設した女子独立学校が原点。その後明治三十三年角筈女学校、三十五年精華女学校と改称した。¹⁹⁾ 明治女学校廃校時にはその生徒を受け入れている。図画教員としては、明治末に豊田宇三郎がいたことしかわからなかった。

淑徳高女——小石川伝通院の輪島門聲が創立し、明治三十六年浄土門立となる。²⁰⁾ 三十九年高等女学校として認可される。当時の中等学校職員録から千葉秀胤、乾長光、安東テイなどが図画教員として判明。千葉の経歴は不明。乾は東京美術学校日本画科、安東は女子高等師範学校技芸科の出身であるが、勤務期間は正確に判明しなかった。

実践女学校——下田歌子が女子工芸学校とともに創立した学校。²¹⁾ 塚原律子の勤務は東京都公文書館所蔵の旧東京府学務課文書中にある実践女学校設立認可書類および当時の中等学校職員録により確認。倉石袈沙治についても同様。塚原律子は最初、本多錦吉郎の彰技堂に学び、後に川村清雄についた。明治二十年から三十九年まで華族女学校にも勤務した。倉石は荒木寛敏に学び、松敏と号した日本画家。田村いとこの経歴は不明だが、編物と毛筆画を担当している。上村百代は、毛筆画担当の図画専門の教員であったと思われるが、やはり経歴不明。設立時に塚原の弟子田副峯子も洋画担当として名が挙っているが、勤務については未確認。

帝国女子専門学校附属日本女学校——現在の相模女子大学の前身にあたる学校。²¹旧学務課文書に明治三十三年九月付南寛明の講師願書類がある。それゆえ開校時から南が図画教員と思われる。南は本名を順助といい、山口県出身で荒木寛一に学んだ、南北合派の日本画家。深田憲治は小山正太郎や彰枝堂に学んだ洋画専門の図画教員。

成女高女——村上義和および鈴木てふの勤務は当時の中等学校職員録より確認。鈴木 of 就任時期と高野いはほの勤務は『女子美術学校校友会雑誌』第四号（明治42年12月）の「会員消息」によって確認。なお、高野いはほが明治四十年十月に病没したと「会員消息」は伝える。村上義和については、前稿(5)の順天中学の項で触れた。

日本女子大学付属高女——日本女子大学の設立と同時に設置された附属高等女学校で、図画教員の松井昇、戸田二（次）郎ともに本校の教員も兼ねた。松井については前稿(5)の攻玉社中学等で触れた。戸田は川端玉章に学び、玉秀と号した日本画家。

三輪田高女——三輪田マサが明治三十五年創立したが、三輪田が明治二十年に設立した翠松学舎が母体となっているという。²²図画教員は前項の日本女子大学附属高女で述べた戸田二郎で、数十年間三輪田高女に勤務したと言われる。

山脇高女——図画教員としては明治四十一年頃の鈴木武之助しかわからなかった。鈴木も主たる勤務は前稿(5)で見たように京華中学および京華商業学校の方と思われる、山脇高女の方は短期間の勤務と思われる。

東京高女——棚橋一郎らが設立し、校長に一郎の母、棚橋絢がなった。設立以来、二十二年間南寛明が図画教員を勤めた。²⁴南寛明については帝国女子専門学校附属日本女学校の項で述べた。

帝国女学校——当時の中等学校職員録によって明治三十六、七年頃に小林鐘吉、豊岡保太郎、吉田六郎の三人が図画を教えていたことがわかった。小林は黒田清輝に学び東京美術学校西洋画科選科卒業。明治四十年まで『東京美術学校一覽』の「卒業生」の項で小林は、帝国女学校勤務となっているが、明治三十七年の中等学校職員録に載っていない。三十八年頃から四十年頃まで再び勤務したのかどうかは不明。豊岡は東江と号し、東京美術学校卒業の日本画家。吉田六郎は洋画を教えたいが経歴不明。

神田共立女学校——明治十九年創立の共立女子職業学校とは特に関係ないと思われるが、²⁵詳しい学校の歴史的事項は不明。竹村千佐は、耕靄と号する日本画家で、山本琴谷、春木南溟に学び、さらに川上冬崖にも学んだ。そして東京女子師範学校で図画を教えた最初期の女性図画教員であった。田川リキについては経歴不明。

上野女学校——竹内たかは当時の中等学校職員録、黒沢たま子については『女子美術学校校友会雑誌』第四号より勤務を確認。竹内、黒沢ともに図画専門の教員であったが、黒沢が女子美術学校日本画科卒業であること以外の経歴は不明。

東洋高女——仏教学者村上専精が創立した学校で、明治四十年九月高等女学校となる。²⁶図画担当教員は、神田共立女学校と同じく竹村千佐と田川リキである。『東洋女子学園八十年史』（昭和59年）が創立当時の教員として竹村千佐を挙げているので、竹村を最初からの図画教員とした。明治四十一年以後も勤務したのではないかとと思われるのであるが、確認できなかった。

日本橋高女——日本橋教育会が設立した女学校で、明治三十九年四月に高等女学校となる。²⁷大正四年財団法人日本橋女学館が組織され、その経営の高等女学校となる。関東大震災による書類等焼失のため教員の正確な勤務期間は不明。内田ふく、鈴木けんの勤務は当時の中等学校職員録によって確認。鈴木けんの勤務期間はさらに『女子美術学校校友会雑誌』第四号（明治42年）によって補正した。後に内田

は野本、鈴木は原と改姓したらしいが、詳しい経歴は不明。

麴町女学校——明治三十九年頃平井富夫、明治四十一年頃河原崎謙吉が図画教員であったこと以外、詳しいことは不明。平井、河原崎ともに東京美術学校日本画科の明治三十年の卒業である。いずれも短期間の勤務であったと思われる。

女子聖学院——男子校の聖学院中学の図画教員が森脇英雄であり、大正期には森脇が女子聖学院の図画も教えたことが確認できるので、明治期も森脇が女子聖学院で図画を教えた可能性が大である。

深川女学校——明治四十一年頃、宮田まきが図画担当であったことが中等学校職員録から判明。ただ、宮田は図画の他に修身や裁縫を担当しているので、図画が専門というわけではないかもしれない。

扶桑女学校——明治四十一年頃、河原崎謙吉が図画担当（講師）であったことが、中等学校職員録から判明。河原崎は既に見たように立教高女、麴町女学校でも図画を教えている。

龍城女学校——明治四十一年頃、川原みゑが図画を担当していることが中等学校職員録から判明。ただ川原の担当教科は図画の他に裁縫、家事、物理、化学、植物であり、図画が専門であるかどうかは不明。

奎文高女——奎文高等女学校とは別に私立高等奎文美術学校が山上満常によって設立されている。どちらの図画も平木弥一郎が担当している。平木は石川県出身で清光と号する日本画家である。平木は明治四十三年の『東京美術学校一覽』の卒業生の項には自営とあり、短期間の勤務か、あるいは学校そのものが廃校になったのかと思われる。

雙葉女学校——カトリック系ミッションによって明治7年仏国童貞女学校が設立され、さらにこの系列の女子語学校が明治三十一年に仏人アンナ＝パロールによって設立される。雙葉女学校はこの女子語学校の生徒を引継いで発足したという。²⁸⁾女子語学校の最終期の図画と英語担当の教員が、スールセン＝レダスという外国人であることが、中等学校職員録で判明。

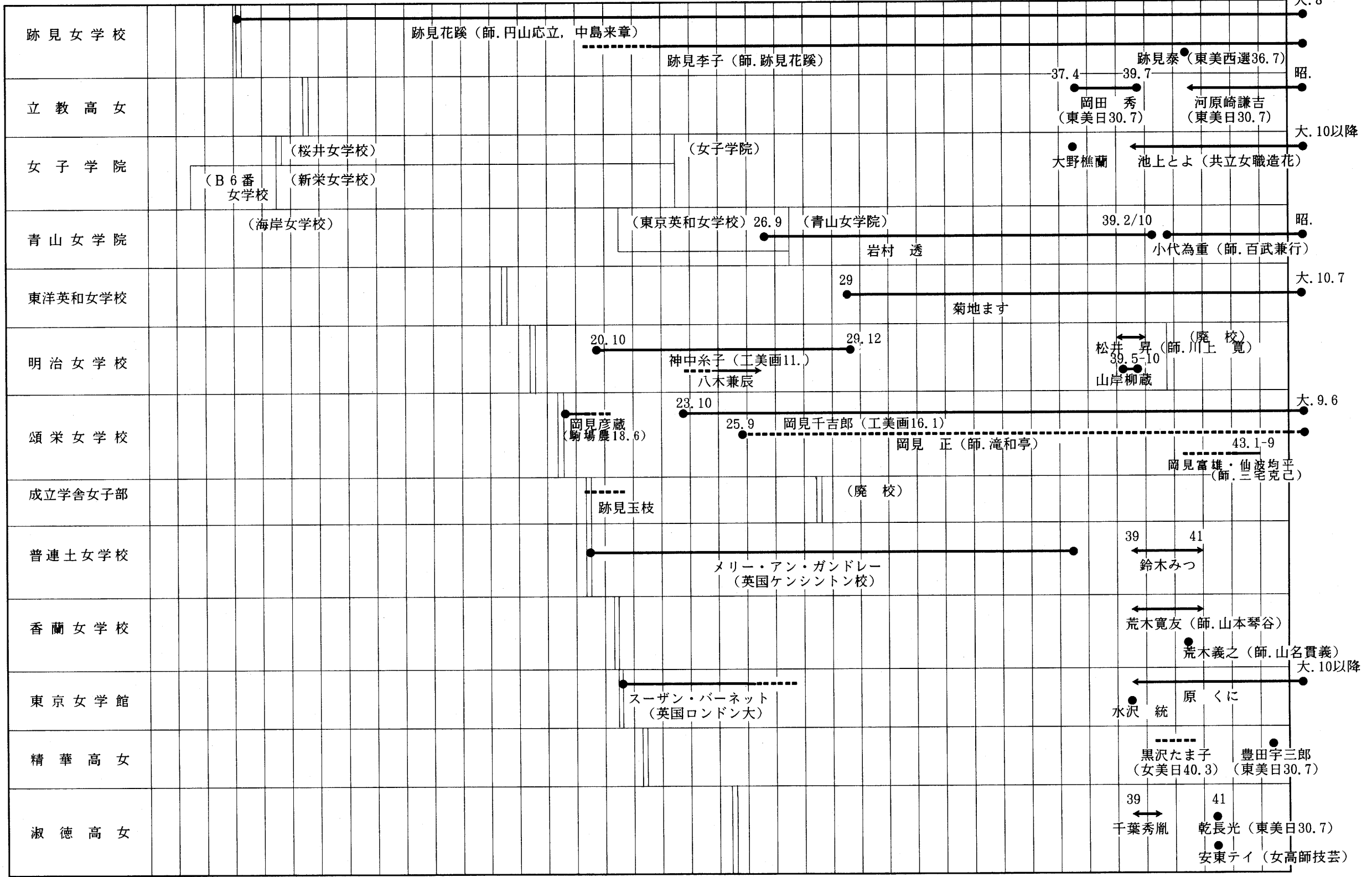
中村高女——鈴木けんの勤務は、『女子美術学校校友会雑誌』第四号（明治42年）で確認。鈴木けんは日本橋高女にも勤務している。日本橋高女の方が本務で、中村高女の方は講師であったように思われる。

仏英和高女——フランスのカトリック系ミッション、シャルトル聖パウロ修道女会が明治十四年に設立した童貞女学校が原点。明治十七年女子仏学校、二十二年女子仏英学校、三十一年高等女子仏英和学校、四十三年私立仏英和高等女学校となる。²⁹⁾現在の白百合学園の前身である。明治二十二年の女子仏英学校の設立願中に図画料があり、さらに「バルヒール図画」（英書、1887年）という教科書名まで挙げている。³⁰⁾初期の図画担当者にははっきりしないが、おそらくフランス人のシスターが担当したと思われる。判明した図画担当者はいずれも『（白百合学園）百周年記念誌』（昭和57年）による。シスター・ジョセフは英国人。英語の他に課外の絵画教室も担当していた。明治四十五年図画専門の原国子が就任してからはジョセフの図画は、専ら、この絵画教室で教えられていたと思われるが、関東大震災で圧死した。なお、明治四十二年頃の林クニは低学年（小学校段階）の国語と図画の担当者。

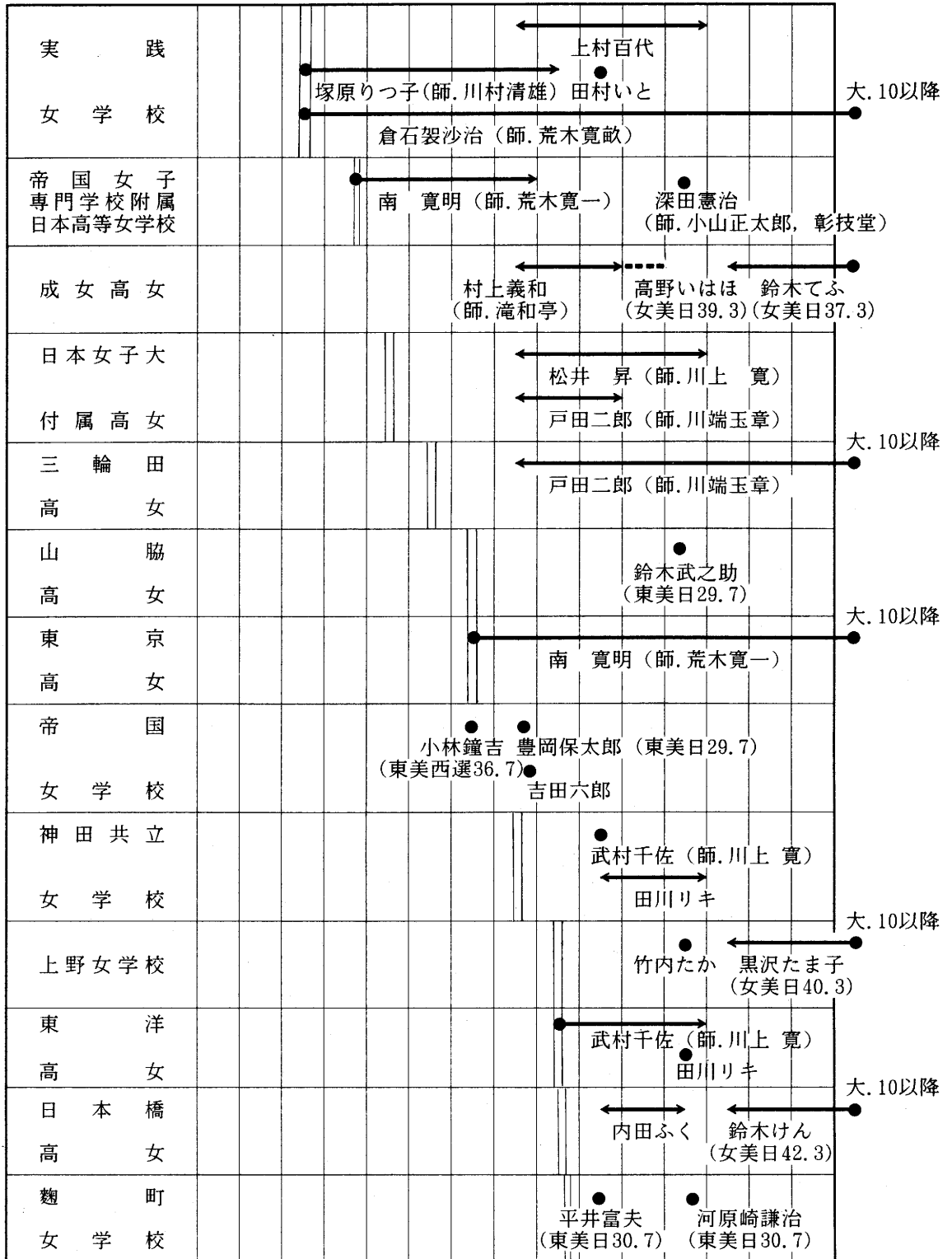
注

- 1) 東京都公文書館所蔵旧東京府学務課文書中の跡見花蹊の履歴を参照。
- 2) 高橋勝介『跡見花蹊女史伝』（東京出版社、1932年）。
- 3) 中等教科書協会『中等教育諸学校職員録』（同会、1908年）、跡見女学校の項参照。
- 4) 跡見輝弥『むらさき経営者』（ときわ書房、1971年）。
- 5) 立教女学院『立教女学院百年史資料集』（立教女学院、1978年）。
- 6) 東京都（公文書館）『東京の女子教育』（東京都、1961年）、および女子学院史編纂委員会『女子学院の歴史』（同学院、1985年）。
- 7) 青山学院『青山学院九十年の歩み』（青山学院、1964年）。
- 8) 東京都（公文書館）、前掲書。
- 9) 青山なを『明治女学校の研究』（慶応通信、1970年）、藤田美実『明治女学校の世界』（青英舎1984年）。この他に小説として臼井吉見『安曇野』（筑摩書房、1965-74年）。
- 10) 『岡山大学教育学部研究集録』第70号、1985年、109-119頁。
- 11) 頌栄女子学院百年史編纂委員会『頌栄女子学院百年史』（頌栄女子学院、1984年）。
- 12) 同上書。
- 13) 東京都（公文書館）、前掲書および東京女子学園七十年史編纂委員会『東京女子学園七十年史』（東京女子学園、1973年）186、196頁。
- 14) 普連土学園百年史編纂委員会『普連土学園百年史』（普連土学園、1987年）。
- 15) 東京都（公文書館）、前掲書134-135頁。
- 16) 同上書、135-141頁。
- 17) 東京女学館百年史編集室『東京女学館資料』第1集（東京女学館、1979年）。
- 18) 東京女学館百年史編集室、前掲書、第3集（1981年）。
- 19) 東京都（公文書館）、前掲書、171頁。
- 20) 淑徳高等女学校『淑徳五十年史』（淑徳高等女学校、1942年）。
- 21) 実践女子学園六十年史編纂委員会『実践女子学園六十年史』（実践女子学園、1959年）。
- 22) 相模女子大学八十年史編纂委員会『相模女子大学八十年史』（相模女子大学、1980年）。
- 23) 東京都（公文書館）、前掲書。
- 24) 東京女子学園七十年史編纂委員会『東京女子学園七十年史』（東京女子学園、1973年）45頁。
- 25) 『共立女子学園七十年史』（同学園、1957年）。
- 26) 八十年史編纂委員会『東洋女子学園八十年史』（東洋女子学園、1984年）。
- 27) 日本橋女学館中・高等学校六十五年史編纂委員会『日本橋女学館六十五年史』（日本橋女学館、1970年）。
- 28) 東京都（公文書館）、前掲書。
- 29) 百周年記念誌編集委員会『（白百合学園）百周年記念誌1881~1981』（白百合学園、1982年）。
- 30) 東京都（公文書館）、前掲書、174頁。

（付記）本稿執筆にあたり以下のような機関に御教示、御協力をいただきました。御礼申し上げます。
 実践女子大学同窓会、東洋女子学園高等学校、東京都公文書館。



第1図 東京府の私立女学校・高等女学校の図画教員勤務一覧(1)



第2図 東京府の私立女学校・高等女学校の図画教員勤務一覧(2)

